

人権保育専門講座4（三重県委託事業）

どんな性の在り方も排除されないクラス・園・職場・地域とは？ ～子どもたちとの出会いから見えてきたこと～



セクシュアルマイノリティの子どもたちの居場所づくり
にじいろ i-Ru（アイル）

たなか いっぽ さん こんどう たかこ さん
田中 一歩 さん 近藤 孝子 さん

人権保育専門講座4は、にじいろ i-Ruの田中一歩さん、近藤孝子さんに「どんな性の在り方も排除されないクラス・園・職場・地域とは？ ～子どもたちとの出会いから見えてきたこと～」と題して、四日市・伊賀・津の3会場でお話しいただき、73名の方にご参加いただきました。

1. ぼくの生い立ち 田中一歩さん

家族、地域に愛されて

ぼくの父と母は兵庫県のそれぞれ別の被差別部落とされる地域で生まれ育ちました。父や母は部落差別が地域や地域の人に責任があるのではなく、社会が作り出したものであることを学び、部落差別のおかしさを知るなかで、差別をなくす活動を始めていきました。そんななかで育ったぼくは、小さい頃から両親や地域の人々の生い立ちの話や部落差別のおかしさをきちんと伝えてもらいながら育ちました。

ぼくが小さい頃、おじちゃんやおばちゃんが紙を持って家にやってくるがありました。ぼくは「おじちゃん、おばちゃん何しに来てるの？」と父に聞いたことがありました。父は「おじちゃんとおばちゃんは学校に行けてないから字が書かれへんのやで。だから自分が代わりに書いているんや」とぼくに教えてくれました。6人きょうだいの末っ子の父以外は、家の仕事を手伝わないと生活ができず、学校に行けなかったからです。

父や母だけでなく、地域の人や学校の先生が父や母と同じ思いでぼくにかかわってくれました。だから、ぼくは「ぼくのことを大事にしてくれるおとながたくさんいる」と実感しながら育ちました。

だれにも言えない3つの秘密

そんなおとなたちにどうしても言えない秘密が3つありました。1つめは、自分は女の子の身体で生まれてきたけど「なんでこの身体なんやろう？ぼくは男の子やのに」と思っていたことです。2つめは、両親がつけてくれた女の子としての名前ではなく、当時大好きだった漫画から、主人公の「つばさ」という名前を自分につけていたことです。そして3つめは、自分は女の子として育てているのに、女の子のことが好きだったことです。

ぼくと同じようなことを思っている人に出会ったことも、聞いたことも、授業で出てきたこともありませんでした。「ぼくは世界でたった一人、変な人なんだ」と思うようになっていきました。この3つの秘密を知られたら絶対笑われる、気もち悪いと言われると思うようになりました。だからこの3つのことは、学校の先生や友だち、家族、誰にも言いたいとも思わなかったし、言ったことがありませんでした。



本当の自分を隠していた学生時代



ぼくは高学年になると男の子にまちがわれることがありました。「ぼく…」と声をかけられることを「嬉しい」と感じる自分がいました。

中学校2年生の時です。体育の授業で使う水着販売のときにこんなことがありました。「2年生です。Mサイズください」と言うと、当時ボーイッシュな容貌だったぼくに、業者の人は男子用の水着を渡してくれました。その時、正直心のなかではめちゃくちゃ嬉しかったです。でも、ぼくは、一緒に買いに行った友だちに水着を見せて「見てこれ、女やっちゅうねん」と言ったんです。友だちは大爆笑してくれました。さらに、家に帰って同じように「こんなことがあってん。どう思う？」と母にも話しました。すると母は、「あんたかわいそうやな。女の子やのに」と言いました。ぼくにとって大好きな母や友だちに気もち悪い、変と思われるのが絶対嫌でした。

女の子の身体で生まれてきた自分は、「普通の女の子」だとみんなに思ってもらうことが、ぼくにとっては大事なことでした。そうすれば、変な人、気もち悪い人と思われずに済むと思っていました。

2. 自分が100%でいられる人との出会い

ぼくが赴任した保育所

ぼくは保育士になるために2年間短大に通い、二十歳のときに女性の保育士として就職しました。初めて赴任した保育所は「子どもの集団づくり」「職員の集団づくり」「保護者の集団づくり」の3つの柱を立てていました。子どもと4月に会って3月にはどんな集団にしたいのか、どの集団も、どの人の人権も大事される集団にするために1年間どんなことをしていくかを話し合い、とても丁寧に保育をしていました。

ぼくは自分の生き立ちも伝えながら、思いや考えを話すことができました。「部落差別がおかしい」ということを話せる職員集団だったからです。でも、自分のセクシュアリティについては、誰にも話せませんでした。



「ひとりぼっちでしんどかったな」

その保育所に転勤してきたのが、横にいるコンちゃん（近藤さん）でした。ぼくはコンちゃんの保育にどんどん惹かれていくことになります。

コンちゃんが5歳児を受けもっていたときのことでした。力の強さや口調の荒さから、「こわい子」と決めつけられていたYがいました。その決めつけは子どもたちだけではなく、実はおとなのなかにもありました。

ある日、ベテラン保育士のS先生が、園庭に落ちていた棒を拾って持って歩いているYを見かけます。そして、Yに「またそんなん持って。何してんの！」と怒ったそうです。事務所にいたコンちゃんのところにやってきたYは、「ぼくは棒を持ってるだけやのに、S先生が怒ってくるねん」と話しました。すごく悔しそうに話すYに、コンちゃんは「わたしが一緒に言いに行こか？」と言って、Yと一緒にS先生のところに話しに行きました。その様子を見て、ぼくはびっくりしました。「大ベテランのS先生に何か言いに行くなんて無理」と思ったからです。ぼくは、何とも言えない気もちで二人の様子を見ていました。そこまで子どもの側に立ちきるコンちゃんの保育をすごいと思いました。何日かしてそのときに思ったことを素直にコンちゃんに話しました。

そして、そのYの話の続きに、5年生の時から誰にも言えてなかったぼくの秘密について、あふれるようにコンちゃんに話していました。

ぼくの話を生懸命聞いてくれたコンちゃんは、「ひとりぼっちでしんどかったな」と言ってくれました。ぼくはその言葉で初めて自分が“しんどかった”ことに気づきました。子どもの頃から自分の部屋と部屋の外のスイッチを切り替えて生きてきて、それがあたりまえになっていたんです。「ひとりぼっちでしんどかったな」という言葉で、「本当は誰かに聞いてほしかった」ということに初めて気づきました。

その人が本当にやりたいことに寄り添う

その後、コンちゃんは「今、いちばんしたいことは何？」とぼくに尋ねてくれました。思いもしなかった問いかけに、ぼくは「男性物のパンツがはきたい」と答えました。たくさんしたいことがあるはずなのに、出た言葉はそれだったんです。そしたらコンちゃんが次の日「パンツいっしょに買いに行こう」と誘ってくれました。

コンちゃんは、子どもでもおとなでも、その人が何をしたいと思っているのか、丁寧に話を聴いて、その人がやりたいと思うことを一緒にやろうとします。それがぼくにとってはすごくうれしかったんです。その後、着たい服を着たり、話したい言葉で話したりできるようになり、すごく幸せだ思うようになりました。ただ、コンちゃんの前ではそれができたのですが、職場や家族、友だちの前ではできませんでした。でも、次第にどこでもコンちゃんの前にいる自分でいたいと思うようになりました。そんななか、二人でいろんな話をしていくうちに出会ったのが「性は多様である」ということでした。

3. セクシュアリティ（性のあり方）の4つの要素

①生物学的性:Sex(セックス)

性染色体、外性器・内性器の状態、ホルモンなどの要素によって決められる性。

②性自認:Gender Identity(ジェンダー・アイデンティティ)

自分自身の性をどのようにとらえているかということ。

③性表現:Gender Expression(ジェンダー・エクスプレッション)

身体性の性にかかわらず、成長過程・社会生活のなかで後天的に身につけていく性のこと。「男らしさ」や「女らしさ」などの性別役割や、服装やふるまいなどの性別表現など。

④性的指向:Sexual Orientation(セクシュアル・オリエンテーション)

恋愛や性愛の対象となる性別のこと。



セクシュアリティの4つの要素は私たち一人ひとりにあり、その人ができています。こうじゃないといけないということはありません。一致しているとか、一致しないではなく、一つひとつがとても重要であり、「100人いれば100通りの性がある」と言われるのは、そういう意味だと思っています。

SOGIESC (ソジースク sexual orientation and gender-identity and expression and sex characteristics) という言葉があります。性的指向、性自認、性表現、性的特徴の頭文字をとった言葉です。

どんな性を好きになるか、どのような性を自認するか、どのような性表現をしているか、またどういった性的特徴をもっているかを表した言葉です。わたしたち一人ひとりそれぞれに SOGIESC を表しながら生きています。

LGBT という言葉をよく聞きますが、この言葉は“人のこと”をさします。現在、この言葉は「LGBT」という特別な性を生きている人たちがいて、その人たちのことを理解しましょう、受け入れましょうといった意味で使われていることが多いように感じています。SOGIESC は“何のこと”かを表

します。ここにいるすべての人たちがこの SOGIESC をあらわして生きています。「LGBT の人を受け入れよう、理解しよう」ではなく、「一人ひとりの性のあり方を尊重しよう」、「SOGIES による偏見や差別のない社会にしよう」ということが今、大事に言われています。

「性は多様である」ことを学べる環境を

保育の現場で貸し出すパンツが一枚しかなかったらどうしますか？「あなた女の子（男の子）なのに、この男の子用（女の子用）のパンツしかなくてごめんね」と言うのか、「今日は選ぶパンツがなくてごめんね」と言うのか…。私たちはその子の「性」を決めることはできません。

子どもは生まれたときから、絵本、テレビドラマなどをとおして異性愛がすてきであると学んでいます。また、その子に「お父さん」「お母さん」がいたらそこで異性愛に出会うことになります。では、子どもたちは「いろんな好きのカタチ」「いろんな家族のカタチ」にどれだけ出合っているか？どちらかという「異性愛以外の好きのカタチはおかしい」という情報はたくさん得ているのではないのでしょうか。「性が多様である」ことは自然なことなので、それを絵本やおとなの話から子どもたちが学べる環境をつくるのが大切だと思っています。「どんな性でも OK」だと子どもたちが思えるようにしていかないといけないと思っています。



4. たくさんのともだちとの出会いから

社会が変わることが大切

ぼくは、性が多様であることを知ってから、「ありのままの自分で生きてい」と思えるようになりました。でも、社会は性が多様であることを知りません。

ぼくの場合、名前を変え、戸籍上の性を変えると、途端に楽になりました。でも、それはたまたま「ぼくが望む生き方」が「社会のあたりまえ」に当てはまっただけで、社会が変わったわけではありません。社会が、性が多様であるという前提に立って意識や制度を変えていかないと、すべての人が生きやすい社会にはなっていないと思います。例えば、保育園の決まり事や保育の内容、子どもへの言葉かけや保護者とのやり取りも見直していかないといけないと思っています。すべての人が自分を生きられるようになるには、社会が変わっていないといけないと思っています。

ここにいるのに、いないものにしてきたのは誰？

いろんな人との出会いのなかで、ぼくとコンちゃんは自分の意識と向き合っていました。次第に、ぼくは「自分はおかしくない」と思えるようになっていきました。

お母さん二人で、一人の子どもを育てている友だちがいます。二人は「自分たちの関係をオープンにできる保育所を探している」と話してくれました。そのときは「早くみつかるといいね」と返しました。でも、家に帰って、コンちゃんと話をしながらあることに気がつきました。よく思い出してみると、ぼくたちは「お母さんが二人」という子どもに出会ったことがなかったのです。今ふり返ると、出会っていなかったのではなく、出会っていてもオープンにできていなかったのだと思います。そして、オープンにできなくさせていたのは、ぼくたちです。ここにいるのに、いないものにしてきたのは、ぼくたちだったのです。



5. 子どもたちとの出会いから

子どもと対話する保育・教育を

ぼくたちは、たくさんの園や学校を訪問し、たくさんの子どもたちと出会っています。ある保育所で、「男の子で男の子の友だちが好きです」という人がいることを伝えると、5歳の子が「きっしょー」と言いました。「何が気持ち悪い？」と聞くと、「だって、男の子が男の子を好きって気持ち悪いやん」「ふつうは男の子は女の子が好きになるんやで。ぼくは男の子やから女の子が好き」と教えてくれました。

「傷つくから言ったらあかん」と注意するのではなく、「なんでそう思うん？」と子どもと対話することで、その子が“思わされていること”を探っていきました。「男の子で女の子が好き」「男の子で男の子が好き」など、自分の「好き」や「大事にしたいこと」はともだちと同じこともあるけれども、違うこともあるよということ伝えました。

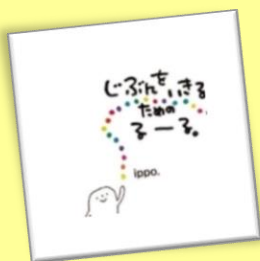


「性」は、自分自身が決めるもの

中学生ぐらいになると、学習を通じて「LGBT」などの言葉を知っている子が増えてきます。「女の子です。女の子が好きです」と言う「レズビアンだ」などと、他人の性を勝手に決めつけてしまう子もいます。他人が勝手に「レズビアンだ」と決めることはできないんだよと伝えています。その人が自分のセクシュアリティをどう表現するかはその人が決めることであり、他人が勝手に決めることはできません。

自分のことを「ふつう」だと言う子がいます。その子は、LGBTではない自分のことを「ふつう」と呼んでいるのです。その子と「普通って何やろな。あたりまえって何やろうな」というやり取りをしました。自分の普通と隣に座っている子の普通は違うことがたくさんあるよ。そんな話ができたらいいなと思っています。

6. 『じぶんをいきるためのるーる。』



〔絵本〕「じぶんをいきるためのるーる。」 ippo：著

一歩さんが自分を大切に生きるために決めている6つのルール。“あたりまえ”とされるルールのなかで息苦しい日々をすごしている子どもたちに、「おかしくなんかないよ」「ひとりじゃないよ」と伝えたい。すべての子どもに「そのままの“じぶん”でいいんやで」というメッセージを伝えたい。そんな一歩さんの思いが込められています。

僕たちの話に、たくさんの子どもたちが感想を書いて返してくれます。「はじめて知ったこと」「話を聞いて自分の考えが変わったこと」「自分のセクシュアリティのこと」「自分の悩み」など、ぼくたちの話に“自分のこと”を返してくれます。そのなかには、本当にしんどい思いを抱えさせられている子どもたちがいます。

ぼくたちはこれからも「自分でいいよ」と言い続けたいと思います。同時に、社会の中にある「自分でいいよ」と思えない環境や構造をつくっている一人がぼくらだとしたら、それを変えていくのもぼくらだと思っています。その2つがあって、子どもたちは心の底から自分でいいよと思えるのではないかと思います。

参加者のアンケートより

- 3歳未満児の保育園に勤めています。毎日が認めてほしいの連続です。そして、無意識のうちに男女の決めつけ等をしていることにも気づきました。子どもたちに限らず、一人ひとりの思いを受けとめ、認めていきたいと思います。そして、打ち明けられる人でありたいと思います。私も小さい頃、様々なコンプレックスや家族の事情がありました。打ち明けられなかった思いがわかるので、手をさしのべたり、共感できる人でありたいと思います。
- 日頃の保育のなかで、深く考えることなく、男女で区別したり、決めつけてしまっているのではないかと振り返る機会になりました。みんなが自分を大切にして、自分らしく生きられるような社会にするためにできることは何かなあと思いました。子どもたちに紹介していただいた絵本を読んでみたいです。
- 性のことだけでなく、すべての人権ってつながっていると改めて感じました。「あたりまえ」「ふつう」の言葉のこわさを感じながら、人とかかわり話すことの大切さを感じました。話さなくては、かかわらなくては相手のことを知ることができないので、たくさん話をしていきたいと思います。
- 今まで思っていなかったことでした。0・1・2歳の保育園なので、まだ早いかなと思って参加しましたが、0歳から大切だということで、いろいろ思いあたることもありました。見ためや自分の勝手な考えで、思い込みをしてはいけないし、それを少しずつでも伝えていきたいと思いません。
- セクシュアリティについて考えさせられました。子どもと日々接するなかで、まずは自分のなかの意識を変え、子どもが居心地良く過ごせるように固定観念をもう一度考え直したり、一人ひとりを受け入れるということをしていきたいと感じました。
- 私の「ふつう」「あたりまえ」は、みんなの「ふつう」「あたりまえ」だと思い込んでいました。それを知らず知らずのうちに子どもたちに押しつけてきたかもしれません。「自分でいいよ」と思える環境をつくれるように、子どもたちが安心していられる場所をつくっていけるようにしていきたいと思います。

